

自由が怖い



堀田耕介

自由が怖い

堀田耕介

自由が怖い、というのは何の保証もないからだろう。今あるものをかなぐり捨てて新しい世界を見たい、そんな気持ちは誰にでもあるかもしれないが、誰にでもできることじゃない。出来てもしないかもしれない。したいという気持ちはあってもしたくないという気持ちの方が勝るといふこともあるだろう。今あることの中に幸せがあればなおさらだ。幸

せと自由は両立しない。というのは野口裕之の言葉として名越康文の著書に書いてあった言葉だが、自由はひとりで感じるものだが幸せは他人と共有するものだからだ。誰かといれば自由になれる、ということもある。それが自由と幸せを共存させることかもしれないが、自由になるために誰かといったと思ったときにそれはすでに自由というよりは幸せに近づいているのだろう。もちろんそれはとても幸せなことかもしれないが。

自由と言っても身体的な自由ばかりではない。内面世界に深く降りていく自由もある。でも自由は本質的にあてがない。時間制限もない。場所の制限もない。制限を外すのが自由だからだ。だから内面世界に限りなく降りて行けば、帰ってくることができるとは限らない。それが内面世界に降りていくことの本質的な怖さだろう。身体的な自由でもそうだ。ふらふらとどこかに出かけて、帰って来られなくなるかもしれない。歩き慣れた場所でそう感じることは少ないけれども、森の中や海の

上で、人は迷子になりやすい。森の中の道や陸地が見えない海で自由であろうとすれば、とてつもない恐怖に襲われるだろう。出口が見えない、向こう岸が見えない場所。そこは自由の土地であったはずが、いつの間にか生死を分ける困難のただなかに入れ替わっている。自由の怖さは、最終的に敢えて自分を生き死にの境に晒すことにあるのだろう。

『ランドリオール』の第109話で、DXとディアは

たがいに思いを伝えあう。「自由になりたいなんて
望み：私には怖くて持てない」「何を望むかは自由
だ」というDXにディアは「そうかもしれない：でも
言わないわあなたには DX： あなたは私の望み
を叶えてしまいそうなもの」という。本当にこわいの
は、望みが叶わないことではなく、本当に叶ってし
まうことかもしれない。そしてそれを叶えてしまう
キャラクターとしてDXは描かれている。ディアの言
葉は、本当は自由になりたい、という叫びにも似
た気持ちだろう。しかしディアの理性は、今まで眠

っていたその望みに懸命に蓋をしようとする。

「今までひとりでも平気だったし 想像もしなかった 誰かを—— 特別だって思うとか 決心が固まってから： 今になって出会うなんて」誰かを好きになること。それは人の最も自由な心の働きかもしれない。あてもないのに恋に落ちる。行く先も分からないのに生死を賭ける。今ある自分の世界に戻って来られないかもしれない。それでもいい。だから恋は自分勝手に、だからこそ強い喜びをもつ。

恋は人の自由を強めるけれども、人を幸せにするとは限らない。特に強い理性で義務の意識をもつ人々にとって、自由は無責任と裏腹で、それは義務に反することへの得体のしれない恐怖へと結びつく。そうなる人はずでに自分が自分であることができなくなる。自分が自分であることさえはぎ取る強い力を、恋や自由というものは持っている。

自分が自分でなくなるときに本当の自分が現れる。しかしその本当の自分は、どんな自分だろ

うか。人は本当の自分を乗り越えて、なりたい自分になろうと努力する。そしてそのなりたい自分になりつつある、あるいはなったというときに、それを放棄して見捨ててきてしまった本当の自分に戻れるのだろうか。

私は二つのブレスレットをもっている。一つは水晶。固い透明なキラキラした輝きで、それをもっている力が湧いて来て、どんな困難でも乗り越えていける、そんな強い自分になれる気がする。なり

たい自分になれるということは、大事なことだ。

もう一つはアメジストを中心に、チャロアイトやリビアンガラスで友人に組んでもらったもの。紫色の落ち着いた光が、本来の自分を取り戻させてくれる。なりたい自分であるときの自分は精力的に仕事をこなし、人の役に立つ。本当の自分であるときは、自分の内面世界に降りて行き、自我の壁を超えた向こうで本当に自分の欲しいものに近くことができる。その世界にいるときに、自分は本

当に自由だと感じることが出来る。どちらも大事だし、どちらも必要なのだ。

本当の自分は大したことないかもしれないが、本当の自分は表現したがつているし、表現されたがつている。自分にしか見えない世界を形にしたがつている。しかしそのままでは自由と引き換えに息絶えてしまうかもしれない危うさを本当の自分は持っている。なりたい自分は本当の自分の真実を必要とし、本当の自分はなりたい自分の強さを必

要としているのだ。

「結婚するのにそばにいてほしいなんて都合のいいことは言えない」「そのことはDXの中でリフレインのように繰り返される。「そばにいてほしいなんて言えない」DXは答える。「手に入らないものを欲しがるのは辛いつて知ってる だから君のことは好きにならない きつと ずっと好きにならないよ」「その言葉を残してDXは去る。「そばにいてほしい」「ずっと好きだよ」という当たり前の言葉しか口にでき

なかつた自分にはその言葉が口惜しいけれども、D
Xはライナスやリドにそつとつぶやく。「君をひとり
にはしない」と。それはリゲインのリルアーナに対す
る誓い——つまりはそれが騎士というものなのだろ
う——とも重なって、物語の重層性を高める強い
働きをもつのだが、困難であればあるほど自由や
恋を求めるたましいの中で自由も恋も意志と結
びつき、それが新たな生き方になる。新たな生き
方を獲得したことで、困難な地平は再び自由の
大地に戻る。それを乗り切っていくことそのものが、

そのたましいにとっての人生の目的になるからだ。

その時すでに自由は怖いものではない。自分を奮い立たせ、最後まで人生の目的地に導いてくれる、自分にとっての貴重な糧であり、大事なパートナーになるだろう。

本当の自分を支え、守り、導く強さをなりたい自分は持たなければならぬ。そのためにはどんなことでもできる。そして多分、その「どんなことでも

できる「ということ」が、本当の意味での「自由」とい
うことなのだろう。

2012・3・29

自由が怖い

<http://p.booklog.jp/book/47411>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47411>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47411>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.